

Bioshock Absolution

芳醇なソルト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無限の中で、蝶の羽ばたきによつて生まれ変わる話。
インフィニットをやつて話に感動したので。

原作の描写にて人種差別、宗教的な事を取り扱っています。作者は本作品において差
別を助長する意図はないところで明記しておきます。
不快に感じる方はブラウザバックをお願いします。

リストートポイント

目

次

リストアート・ポイント

1. 海の上で

ブツカー・デュイットは荒れる海を進む小舟の上にいた。

何故ここにいるのか、思い出そうとすると、脳裏に言葉が浮かんできた。
Bring us the girl, and wipe away the debt.

娘を連れてくれば借金は帳消しだ

ブツカーは出来た人間ではなかつた。

酒とギヤンブルに溺れ、こさえた借金は途方もないほど。そんな時にこの依頼が飛び込んできた。

報酬は言葉に出来ないほどのもの。これで抱えた借金を全て返せると考えたブツ
 カーはこの依頼を受けたのだった。

「ずっと座つて いるつもりなのかな？」

「他にどうするの？立つの？」

「そうじやない、漕ぐんだ」

「漕ぐ？ 考えてもみなかつたわ」

2人の男女が言い争い（全く声にやる気はなかつた）をしている。帽子をかぶつていて全く顔は見えなかつたが、声からして漕いでる方が男、座っているのが女だろう。

今回の依頼主であるルーテス兄弟だ。名は名乗らなかつた。

ブツカーには依頼主が困る原因がどういうものだろうとどうでもよかつた。銃を使うことも今まで珍しいことではなかつた。だから、女が渡して来た箱に銃が入つていても、そういう仕事かと納得しただけであつた。

むしろ全く知らされずにやるよりは心構えもできてよいと考えるほどである。

スライドを引いて、弾が入つてるか確認する。撃鉄を起こし、引き金に指をかけて——

そこでブツカーは我にかえつた。

ブツカーには自分が今何をしようとしていたのか、理解していた。だが全く意味が分からなかつた。

いつのまにか2人を敵として見ていて驚きを覚えていた。彼女らは敵ではない。むしろ報酬をもらうまでは守るべき存在である。

だが、震える手が訴えている。

何か、何かを奪われた。

それは大切なのだ。いや、大切ではなかつた。

それは命に代えても守るべきものだ。いや、どうでもよいものだつた。

それは、それは、何だつただろう？

鼻に熱さを感じた。

手を当てると、赤いものがついた。

2人が言い争いをやめこちらを見ていることに気づく。

慌てて銃を箱に戻す。中身を確認するふりをしつつ、目を2人にやる。彼女らは目を離してはいなかつた。

機嫌を損ねるべきではない。

「漕ぐのを手伝うよ。どこにむかうんだ？」

ブツカーは小舟の端にある予備のオールを手にした。腕を回してやる気をアピールする。

ブツカーは2人に本能的な敵意を覚えつつも、敵に回すべきでないと判断していた。報酬のこともある。だが、カンがそう言つていた。

ブツカーには天性の戦闘能力があつた。それはウンデット・ニーの戦いでも、ピン

カートン探偵事務所でも大いに役立っていたが、ブツカーが本当に頼りにしているのはカンのよさである。

それは最早預言と言つてもいいほどで、命の危険である時、強敵を倒すチャンスの時に必ずカンが囁き、勝利を収めてきた。

そのカンが言つているのである。敵意を飲みこみ、ブツカー自身らしくないと感じる行動をしたのはそのためである。

2人は驚いていた。その驚きようといつたら、晴れた空の下道歩いていたら、首筋に水滴が落ちてきたような、予想外の出来事を体験したような様子だつた。

「あ、ああ、真っ直ぐ漕いでくれ」

「了解」

ブツカーは力を込めて漕ぎ出した。荒れ狂う海の上、何処に行くかも分からずに、ただ真っ直ぐに。

「どういうことだ？」

「分からぬ。今までこんなことは一度も」

「ない。箱の中身は？」

「同じ。何も変わつていな……はず」

「はず？ 曖昧だな」

「変わる場所はそれぐらいしか。でも私の記憶は正しい」

男が漕ぐのをやめ、2人が神妙な様子で話し合い始めてもブツカーは気にしなかつた。ただ、進むべき道に向かつて、自分で漕いでいた。

2. 空の都市で水に沈む

着いた灯台の頂上で、椅子で空を飛んだ。

鼻で笑いそうな出来事であるが、全くの事実である。何しろブツカーが体験したことなのだから。

飛んだ先は都市である。空に浮かんだ都市。名前は知らない。当たり前だ。空に浮かぶ都市なんてブツカーは聞いたことがなかつたし、もし聞いていたとしても馬鹿らしいと思いながら聞き流すだろう。

ブツカーは不気味な程落ち着いていることを自覚していた。先程までわけがわからないまま空を飛び、空に浮かぶ都市をこの目で見るという、常識外れもいいとこなことを体験していた。取り乱しても無理はない。

だがブツカーは全く動じていなかつた。まるで決まっていることのように、怪しい椅

子で躊躇うことなく空を飛び、美しい都市を無感動に見て、浅い水が満ち、歌が聞こえる神聖そうな場所に立っていた。

ブツカーは教会が嫌いだ。清浄な空気が満ちるこの場所は嫌だつた。極めつけはまるで自分が神とでも言わんかのような老人の絵と像がブツカーの嫌悪感を最大限に引き出していた。

にしても腹が立つ顔をしている。数々の人を殺し、時には顔を剥ぐといった惨虐な行為をしたが、私利私欲（仕事ではやつていたが）で人を殺すことはないブツカーだつたが、ルーテス兄弟に似た本能的な敵意をブツカーは感じていた。

足早に進む。途中信者らしい人に声をかけられても会釈だけして通り過ぎた。

そうしてたどり着いた場所は、3本の川が合流し1つの大きな川となつたような場所だつた。合流地点では信者たちが集まり、恐らく神父であろう老人が、聖句らしきものを述べていた。

あの像の老人ではなかつたが、信心深い教徒であることは間違いない。ブツカーは信者たちをかき分け、神父を通り過ぎようとした。
肩を掴まれる。

「新人かな？ 随分と急がれているようだが」
「俺は街へ行きたいだけだ」

「街へ行くだと？」

神父は鼻にかかるような声を出した。ハツハツハツと笑う。

ブツカーレは神父に対し怒りを覚えたが、銃が必要な仕事で、しかも娘の居場所さえ分からぬ状況で騒ぎを起こすほど愚鈍ではなかつた。無言で続きを促す。

「兄弟よ、街へ行くにはその身を清めねばならぬ。我らの預言者の、ファウンダーズ、そして主の前で、洗礼の水によつて生まれ変わるので。さあ、その身を清めたまえ！」

洗礼、と聞いてブツカーレに嫌な思い出がよぎつた。

あれはウンデット・ニーの戦いのあと、人殺しの自分に嫌気がさしたブツカーレは教会で洗礼を受けようとした。自分の過去と罪を洗い流そうとしたのだ。

だが途中でやめた。何故辞めたのかはブツカーレも確固とした理由を見つけ出せなかつた。殺した人の顔を思い出し、忘れてはならないと思つたかもしれない。もしくは、同じ戦場で戦つた仲間を忘れたくなかったかもしれない。

ともかく、それ以降教会には苦手意識を覚えるようになった。

依頼を放棄するわけにはいかない、洗礼を無視して騒ぎを起こしたくないといつた打算的な考えがよぎる。だが、ブツカーレは洗礼を受けたくなかつた。

「他の方法はないのか？」

「コロンビアは神聖な都市である。下のソドムからやつてきた者は穢れているのだ。だ

がコロンビアをお造りになつた偉大なる預言者は、ソドムの住人にもやり直す機会が「わかつた、もういい。受けよう」

面倒くさい。

ブツカーハは感情と理論で己の心を叩きのめした。

「よろしい。では」

肩を掴んでいた手をどけ、神父はブツカーハの手を握った。

その凄まじい力にブツカーハは驚いた。まるで抵抗できない。

「おい……」

「預言者の名において、ファウンダーズの名において、主の名において、汝を洗礼する！」

頭を手で抑えられ、水に押しつけられる。

神父の予想外の筋力に驚いたが洗礼の形式は知つてゐる。故に水に沈められるのはまだいいのだが、

（長すぎる……、息が）

神父の力は抵抗を許さない。水の中で神父が何かを言つてゐるのが分かつたが、それよりも息苦しさと暗闇がブツカーハを支配していく。

ブツカーハは罵にかかつた己を呪いながら、意識を手放した。

「ここは…俺の事務所か？」

ブツカーは事務所の机の前に立っていた。

「俺は、洗礼を受けた」

声に振り向くと、椅子に男が座っていた。顔はよく見えない。

「罪は洗い流された。だが過去は無くならなかつた」

「過去が無くならないならば、罪が洗い流されても痛みは無くならない」

「痛みが無くならないならば、罪は無くならない」

「罪が無くならないならば、罪の証は無くならない」

赤子の声が聞こえる。

「罪を赦したまえ。そのためには」

声が聞こえなくなつた。男の姿がかき消える。

白い光が、視界を塗りつぶした。